

# 障害のある人を対象としたオープン・カレッジの実施

## — 発達障害のある高校生の進路選択支援・知的障害のある人への学習機会の提供—

薬師寺明子・おかやま発達障害者支援センター（発達障害のある高校生の進路選択支援のみ）

### I. はじめに

#### 1. オープン・カレッジとは

2022年12月に発表された文部科学省の学校基本調査(確定値)によると、2022年度の大学進学率は前年度から1.7%増の56.6%で過去最高を更新した。短期大学と専門学校を含む高等教育機関への進学率は前年度と同じく83.8%で過去最高と同水準だった。高校を卒業後に8割を超える人が高等教育機関に進学していることになる<sup>1)</sup>。また、多くの人が市民講座やカルチャーセンター、老人大学等で生涯学習、生涯教育等として学ぶ機会を得ている。しかし、知的障害のある人の場合は特別支援学校卒業後、大学等の高等教育を受ける機会がないのが現状である。

2014年に障害者権利条約に批准し、2016年には差別解消法も施行等から、共生社会の実現に向けた取り組みが推進されている。学習機会の少ない知的障害のある人への学習機会の提供は、教育の権利保障、教育機会の均等のためにも必要なものである。

学習機会の少ない知的障害者を大学に招き、講義を受けてもらうという取り組みのことをオープン・カレッジという。オープン・カレッジは1995年、東京学芸大学において、大学教員や付属養護学校(現在は特別支援学校)、多摩地域の養護学校教員の教員等で構成している「養護学校進路指導研究会」が、特別支援学校を卒業した知的障害のある人を対象に大学公開講座「自分を知り、社会を学ぶ」を開講したのが始まりである。1998年に大阪府立大学安藤研究室がオープン・カレッジとして活動を始め、活動に賛同した大学関係者を中心に広がりを見せ、1999年度には武庫川女子大学、2000年度には桃山学院大学が開講した。その後、宮城大、徳島大等でも開講し全国的に広がった<sup>2)3)</sup>。近県では、島根大学が2007年に学生らが中心となりオープンカレッジ実行委員会を立ち上げ、2008年10月から2年を1期とする「知的に障害のある人のオープンカレッジ in 松江」(毎年度秋・春2日間ずつ開講)を開講している<sup>4)</sup>。

オープン・カレッジには三つの理念①知的障害者の人権(教育を受ける権利)の保障、②知的障害者の変化(発達)の可能性の保障、③地域社会に対する大学の貢献がある。オープン・カレッジは知的障害のある人に、ただ学ぶ場を提供するだけでなく、「教育権」や「発達保障」について実践を通して実現しようとする取り組みである。

#### 2. 本報告について

本報告は、発達障害者支援センターと協働で実施している、発達障害のある高校生を対象とした進路選択支援「オープン・カレッジ in 美作大学」及び、学生が主体となって実施している知的障害のある人を対象としたオープン・カレッジ「きんちやい みまさかれっじ」についての実践内容である。

### II. オープン・カレッジ in 美作大学

#### 1. 実施背景

近年、普通高校に進学した知的障害を伴わない発達障害のある生徒の教育上の支援、特に進路選択支援については、多くの課題がある。おかやま発達障害者支援センター県北支所(以下;支援センター)においても、普通高校等に在籍する生徒からの相談が、多く寄せられている。当事者の「自己理解」や家族の理解が進路選択にお

いては必要であるが、その理解を進めていく上で困難さがあるようである。

そこで、この現状の課題解決にむけ、2013 年度から支援センターと薬師寺研究室が協働し、発達障害のある人を対象としたオープン・カレッジを企画・実施している。なお、2013 年度は試行的な実施、実践報告として地域生活科学研究所を主催とするシンポジウムを実施することで、地域に活動を公開し、2014 年度より本格的な実施となった。2015 年度より、地域生活科学研究所からの助成を得て毎年実施している。

## 2. 実施内容

2020 年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響もあり、通常 2 日間の開催であるが、感染状況が落ち着いた頃に 1 日だけで実施した。2021 年度は前期期間中に通常通り 2 日間の開催日程で実施することができた。2022 年度はコロナ拡大前と同様の日程で実施することができたが、参加者は少なかった。

1) 企画：筆者及び支援センタースタッフ

2) 実施日：2022 年 6 月 11 日(土) ・6 月 18 日(土)

3) 実践者：

①全体の運営：筆者及び支援センタースタッフ

②参加者へのサポーター及びスタッフ：薬師寺研究室ゼミ生(3 年生 9 名・4 年生 6 名)。

③講義の際の講師：有資格の大学教員及び大学職員

④模擬作業：大学附属図書館職員・学生募集広報室より事務作業提供

4) 参加者：普通高校に通う発達障害のある人で、進路選択支援が必要であり、学校に安定して通うことができている状態にある 4 名。参加にあたっては、所属校の担任、特別支援教育コーディネーター、相談室の教諭が、参加者・保護者と相談の上、申し込む形式をとった。①参加者・保護者にプログラム概要の説明、②保護者や所属校の担任等から参加者の配慮点の聞き取り、③参加者同士のグルーピングの検討、④参加者と学生サポーターのマッチング等を目的に、支援センターが所属校への事前訪問を実施した。

5) 倫理的配慮：プログラムの評価研究に関する参加者への同意および個人情報の記載等については、事前訪問時に参加者に説明を行い、書面にて同意を得た。

## 3. 実施の流れ

1) プログラム実施前：支援センターが参加者の所属校に事前訪問を行い、得られた配慮点等の情報をもとに運営スタッフで企画会議にて共有。

2) プログラム期間：1クール 2 日間。土曜日を利用し、1 回 5 時間程度(表 1)。

表 1 スケジュール

1 日目	2 日目
オリエンテーション (15分)	
講義 I (45分) (アンケート記入含む)	講義 II (45分) (アンケート記入含む)
休憩 (10分)	休憩 (10分)
マナー講座 I (20分)	マナー講座 II (20分)
グループワーク (30分) (アンケート記入含む)	グループワーク (30分) (アンケート記入含む)
昼休憩 (60分)	昼休憩 (60分)
模擬作業 I (90分) (1日目と2日目でグループを入れ替える)	模擬作業 II (90分) (1日目と2日目でグループを入れ替える)
グループワーク (30分) (アンケート記入含む)	グループワーク (30分) (アンケート記入含む)
	全体の振り返り (15分) (アンケート記入含む) 修了証書授与

内容と役割分担	
講義	<p>講義 I 「働く上で大切なコミュニケーション」 (キャリアコンサルタント資格を持つ大学職員が担当)</p> <p>①学校と職場の違い ②挨拶について ③報告・連絡・相談 (ホウレンソウ)について</p> <p>講義 II 「基本的な生活習慣の大切さ」 (看護師資格を持つ大学教員が担当)</p> <p>①学校と職場の違い ②朝ご飯を食べること ③睡眠時間の確保 ④朝の準備や段取り ⑤身だしなみを整える</p>
マナー講座	<p>マナー講座 I (社会福祉学科の学生が担当)</p> <p>①挨拶と報告をする時は ②作業中の指示 ③質問をするタイミング</p> <p>マナー講座 II (社会福祉学科の学生が担当)</p> <p>④寝る前の過ごし方 ⑤出勤の際に ⑥身だしなみの整え方</p>
模擬作業	<p>模擬作業 I 「図書館作業」 (附属図書館職員が担当)</p> <p>①抜き取り作業 ②返却作業</p> <p>模擬作業 II 「事務作業(実習日誌作成)」 (支援センター職員が担当)</p> <p>①ラベル印刷 ②ラベル貼り ③用紙のとり込み</p>

図 1 プログラムの内容と役割分担

3)プログラム内容:「働くことを知る・学ぶ」をテーマとして、①講義、②マナー講座、③模擬作業を実施(図1)。それぞれの内容を振り返るため、実施直後にアンケート記入し、それらをもとにグループワークを実施した。プログラム終了後は、当日参加したスタッフで事後ミーティングを実施した。

4)参加者及び支援者の動き:グループワークや模擬作業は2グループに分け、模擬作業は「事務作業」と「図書館作業」を準備している。通常は、グループを半分に分けて、1日目と2日目で作業を変えて実施しているが、参加者が4名ということで、1日目に「事務作業」2日目に「図書館作業」を実施した。参加者の個性を配慮してグループを分けている。参加者への直接的な支援者として、学生が「学生サポーター」としてペアでプログラム全体を通して、参加者が困った時や分からない時のサポート役として配置した。また、サポーター以外の学生は「学生スタッフ」として、プログラムの準備や片づけ、模擬作業の際の見守り等を行った。



写真1 講義「基本的生活習慣の大切さ」



写真2 マナー講座①



写真3 グループワーク



写真4 模擬作業 図書館①



写真5 模擬作業 図書館②



写真6 模擬作業 図書館③



5)プログラム実施後:支援センターが参加者の所属校を訪問(事後訪問)し、事後面談を行った。保護者、担任、特別支援教育コーディネーター、相談室教諭等に可能な範囲で同席してもらい、参加者にプログラムの感想等を聞き取った。また、プログラムを通して得られたことに関して、学校生活(学外実習等)や家庭生活で取り組みそうな点について提案。後日、総括としてスタッフ(学生除く)で反省会を実施した。

### 3. 実施結果及びまとめと今後の課題

本年度は、新型コロナウイルス感染拡大の影響はあったものの、「オープン・カレッジ in 美作大学」を通常通り2日間実施することができた。昨年度は9名もの参加があったが、今年度は4名の参加であった参加者やその保護者がこの取り組みにとっても期待して参加してくれており、高校から担任や進路指導担当、特別支援担当教員の見学もあった。大学で学ぶこと、自己理解を意識しながらの模擬授業の経験、そして学生との関りは、通常の高校生活では得られない経験であり、参加者は多くのことを得られたようである。学生サポーターや支援者がいることで、安心して参加でき、そこでの成功体験を得て、自己理解を深め、進路選択への手がかりをいくらか得られたのではないだろうか。

学生サポーターや学生スタッフとして参加してくれているゼミ学生にとっても、参加者との関りや支援を通して、特性の理解や声掛け等の支援方法を考える機会を得ることができた。1日のプログラム終了後に、行われる参加者の状況や支援内容、プログラムについての振り返りは、支援者としての学びを深めるとともに、次の支援につながる貴重な機会であった。

## Ⅲ. きんちゃい みまさかれっじ

### 1. 実施背景

2014年度3年生のゼミ生がオープン・カレッジを企画し、2015年度から「学習機会の少ない方を大学に招いて講義を受けてもらう。」「大学の講義で得た知識や経験を基に、地域でいきいきとした生活を送ることにつながってほしい。」という目的としてスタートした。

### 2. 実施内容

2022年度4年生のゼミ生6名、3年生のゼミ生9名が企画、実施した。後期については、大学の公開講座を兼ねて実施した。

#### 1) 実施日及び科目

前期:2022年10月22日(土)

参加者:知的障害のある成人 3名

内容:オリエンテーション・①SDGs・②防犯学・振り返り

①SDGs:講師は岩田裕久氏(岡山市市民協局市民協働部 SDGs・ESD 推進課)

②防犯学:講師は岡山県警生活安全課(2名)

後期:2022年11月22日(土)

内容:オリエンテーション・①パラスポーツ学・②パラスポーツ実技・振り返り

①パラスポーツ学:講師は泉水弘美氏(岡山県障害者スポーツ協会)

②パラスポーツ実技:講師は姫野厚志氏・吉田義則氏(岡山県障害者スポーツ協会)

表2 きんちがい みまさかれっじ (2015-2021)

2015年度	前期：1日目 全体講義「文化人類学」・選択科目「英会話」「音楽」 2日目 全体講義「料理」交流会 後期：1日目 「工作」「悪徳商法対策講座～あきらめない～」 2日目 「科学実験」交流会
2016年度	前期：1日目 「パソコン」「マナー講座」 2日目 「栄養学」「護身術」交流会 後期：1日目 「和菓子作り」「茶道」 2日目 「災害学習（消防署見学）交流会
2017年度	前期：「ストレッチ」「口腔ケア」振り返り 後期：「フラダンス」「経済学」振り返り
2018年度	前期：「防災学」「工作」振り返り 後期：「歴史学（津山）」「ポッチャ」振り返り
2019年度	前期：「保健学」「声楽」振り返り 後期：「調理実習」「栄養学」振り返り
2020年度	前期：「心理学」「コミュニケーション学（手話）」振り返り 後期：「食品学」「美作大学図書館利用ガイダンス」振り返り
2021年度	前期：公衆衛生学」「家政学（被服）」振り返り 後期：「気象学」「防災学」振り返り



写真7 SDGs



写真8 防犯学



写真9 オリエンテーション



写真10 パラスポーツ学



写真11 パラスポーツ実技①



写真12 パラスポーツ実技②



写真13 パラスポーツ実技③



写真14 パラスポーツ実技④



写真15 最後に記念写真



写真16 島根大学との交流会

## 2) 実施結果及びまとめと今後の課題

2015年度から始めた活動であるが、なかなか一般市民の方に理解してもらう機会が少なかったということもあり、2日目は美作大学公開講座との共催で行った。一般の参加者は少なかったものの、「オープンカレッジ」そのものを知ってもらう機会となった。また、以前から交流のある島根大学の「知的に障害のある人のオープンカレッジ in 松江」を開催している学生4名と教員も1日目に参加し、懇親会、交流会も実施した。新型コロナウイルス感染拡大でこれまで多くの人を招くことができていなかったが、今年度は少しずつではあるが、以前の取り組みに近づいてきたようである。

学生が主体となって、企画、運営をしており、実施までに様々な行程がある。講義内容の検討、講師探しと連絡調整、参加者募集の広報活動、講師との打ち合わせや当日資料のルビふり等、多くの準備を行い、当日を迎えている。学生は実習やゼミ活動をしながらの準備を一人ひとりが役割をもって取り組んでおり、学生の成長の機会ともなっている。



2015年度から始めた小さい活動ではあるが、岡山県でのオープン・カレッジは本学だけである。今後も継続できるよう努めていきたい。

#### 参考文献等

- 1) 文部科学省 令和4年度学校基本調査(確定値).
- 2) 建部久美子編(2001)「知的障害者の生涯教育の保障ーオープン・カレッジの成立と展開」, 明石書店.
- 3) 杉本正・兼松美幸(2010)「実践報告『オープン・カレッジの展開』」, 帝塚山大学心理福祉学部紀要.
- 4) 京俊輔・薬師寺明子(2018)「オープンカレッジに取り組む中国地方の大学間交流」, 障がい者生涯学習支援研究, 第3号.